

名所との決別としての「木思石語」

—雑誌『旅と伝説』のあるき方—

野村 典彦

◇『旅と伝説』と「木思石語」

昭和五年二月号。三元社から発行されていた『旅と伝説』といふ雑誌の表紙に小さな、ほんとうに小さな変化が起つている。「伝説」の「伝」、今で言う旧字体の漢字で示されている「傳」の字から「、」が消えたのである。現在でも「専門」の「專」の字の肩に「、」を付した誤字の看板を見かけることがあるが、『旅と伝説』誌も昭和五年の「新年特別号」までは、表紙のタイトルロゴに誤字を抱えた雑誌だった。ちなみに、点の付いていた最後、「新年特別号」は巻頭から「伝説と習俗」（柳田國男）、「水の木火の木」（折口信夫）、「日高国義経神社の由来」（金田一京助）、「馬蹄石物語」（中山太郎）と並ぶ。目次には、早川孝太郎、佐々木喜善、宮本常一、榎木敏といった名前も見える。

□承文芸研究の立場からは、目次の次の頁に排されていることの多い「郷土紹介」の項の変化にこそ注目しなければならない。時期は創刊から半年少々過ぎたあたり。ページの意匠が全く変えられていないので見落とされてしまうけれども、昭和三年一月号（創刊号）から四月号までと、八月号以降では、その内容の差が大きい。見出しを見る限りにおいては「伝説、民謡、口碑並に写真募集」と「口碑」の二字が加えられただけなのであるが、実は「伝説」の定義そのものに変更が加えられている。創刊時のものは「伝説（広い意味に解釈して、民謡、風俗、名物、名所旧蹟記事やそれに關した写真等）を募集します」とある。これを八月号では「何に限らず研究上有益な物、又世間に知られて居ない物なら歓迎します」と改め、「伝説」が如何なるものであるかの記述は見られない。定義は本文においてなされている。

今でもまだ伝説といふ言葉は、可なり色々の違つた意味に使はれて居る。出来ることなら一定して置く方が便利であるが、其為には今少し御互ひに話し合つて見る必要があると思ふ。強ひて主張するといふ程でも無いが、自分などは現在ごく狭い意味に此語を用ひて居る。『旅と伝説』は之に比べると幾分か弘く、殊に読者寄稿家の心持に至つては、それ／＼異

同があり其範囲も必ずしも一定しては居ない様に見える。



◆傳説民謡並に寫眞募集◆

餘りに、嘉西物語文明に留めた地跡を語る「郷土紹介」大抵是國有の面目が剥はれんとしてあるのであります。それにつて是々の祖先が残して與れた尊い精神や傳説を次第的に消してゐる事實に遺憾に思ひ立つてあります。これがために、讀者の讀者は傳説保護のために奔走するつゝあるのですが、各地の人々が相續つて保存しようとする、業的氣味のものはありません。それで今はその意味に於き意面を開放し、讀者と共に之の支持と讃美されるべきである。その方法として讀書者に傳説（廣くものに傳説）と民謡、風俗、名物、各種踏詠等を募集します。

本誌は（廣くものに傳説）と民謡、風俗、名物、各種踏詠等を募集します。専業の学者等の内研究上有利あるものは、或は詩とすべき物等は斯道に傳説者に御撰定を許す程三十種程度の撰定し、新説を附した上本の口譜の如きをもして其版として年二回刊出せらる（本誌六ヶ月以上の約定期には無む）。斯界に「くわらかくも貢獻したいと思ひます。何卒御幸頼めと存候。御願申します。〔即ち西日本に於ける傳説等の傳説用語を記載する〕」



◆傳説、民謡、口碑並に寫眞募集◆

何に限らず研究者等なれば、又古に知られて居ない物などをして頃音者等と共に其の祖先が最もよく伝いたいもの等を承てて保存して行き度いと申します。これで餘計と出來るだけではない。單に古來の歴史的資料等付けてでもよろしいのです。面白ないかも知れませんが餘計な名題の方は「コトワツ」、讀字も大いに恐縮します。又務つよい土産の紀行文等は避諱を忌します。これにて僅秀あるものは避諱を忌します。

宛名は 東京市京橋區尾張町二丁廿一

三元社内
旅と傳説編輯部

「郷土紹介」昭和3年8月号

「郷土紹介」昭和3年1月号

右に引用したのは、八月号卷頭におかれた柳田國男「木思石語⁽²⁾」の冒頭。「伝説と口碑」の節は、まさに「伝説」の定義のやり直しを迫る書き起こしとして、「郷土紹介」の変更と運動している。翌九月号卷頭「木思石語」の二回め冒頭「旅と伝説」の節。ここでも「我々日本人の保有する莫大な口碑の中で、特に「伝説」と称する一種類ばかりが、何故にかく旅人の心を動かし、其結果或は誤つて伝説即ち口碑のすべてであるかの如く、解する者をさへ生じたのであるか。自分は此疑問に答ふべく、三つほど理由を挙げることが出来る」と、「伝説」の確認がまず行なわれ、「郷土紹介」の見出しに「口碑」の二字が加えられた意味が再び説明されるのである。

三文め四文めには次のようにある。「心ある旅人が若し其理由を齟嚼してくれられるならば、単に採集の興味が之に由つて更に加はるのみでは無い。行くことはその協力に基づいて、恰かも今日の植物学や昆虫学が、確乎たる一派の学問となつたと同じやうに、新らしい社会知識の一系統を、打立てることも不可能では無いのである」。「確乎たる一派の学問」を「打立て」ための「伝説」再定義であることが読者に向かつて説かれる時、具体的に示されているイメージが、「採集」という身ぶりを基礎とする「植物学や昆虫学」であることに注意しておきたい。これは《紀行文》などの抒情的な文章との決別が求められている

⁽³⁾

と印象づけるためだつたとも考えられるからだ。

◇ 紀行文の募集と昔話の募集

昭和三年三月号、編輯後記には「伝説と紀行文を募集します。」
(略) もつと伝説や紀行文は抒情的で美しくなければいけないと
思ふ」「それからもう一つ。郷土紹介の意味で名所や古刹、神社、
風景などの写真に簡単な紹介文を添えた投稿などを歓迎します」

という募集がなされていた。「伝説」「紀行文」「郷土紹介」に傍点が施されている。ここでの「伝説」は旧定義であるわけだが、周辺に『紀行文』や『名所』を伴うことをまず確認しておきたい。八月号で一新された「郷土紹介」の項にも、最後に「又稀らしい土地の紀行文等も募ります」が付されている。昭和九年に雑誌のレイアウトが大幅に変更されるまで、『紀行文』募集の部分を含みつつ「郷土紹介」は姿を見せる。

『紀行文』が「たずねてゆく旅人側のものであるのに対し、『郷土』は旅人を迎える側、あるいは送り出す側にある。この雑誌は、伝説を挟んでふたつの視座を抱えていた。そして、柳田の『学問』はそのいずれでもない。「木思石語」という『旅と伝説』に掲載された論文においては、旅人の視座から伝説に近づくことによつてお国自慢になりがちな『郷土』のまなざしを解放し、『学問』の第一歩として「他の地方にも同じ話があつたことを発見する」ことを前向きに受け止めることが必要性を説く(三回め・十月号)。旅人の視座は有効なのだけれども、『学問』であるからに

は『紀行文』の抱えている「文学的修辞」を封印する必要があった。『旅と伝説』にも連載をもつた斎藤清衛は、自らの紀行文に対する感想として発せられた「田山花袋君も、紀行の中から、到頭、主観的のものを棄てきらなかつた」という柳田の言葉が、「私の急所をついた」と三冊めの紀行文『東北の細道に立つ』(昭和十年・春陽堂)の「跋」に記している。

一方で柳田は、この雑誌で「昔ニ」と「耳で聴いた」話を募集してゆく。表紙から「、」が消えた昭和五年。四月号の「編輯後記」には「昔話新釈」の後に置かれるべきだった柳田の読者に対する呼び掛けがある。「私は今日日本の昔話の分類と整頓とに熱中して居ります。もし読者の中に、耳で聴いた「昔ニ」といふ話を記憶し、若くは新たに年寄たちから之を聴取する便宜を持って居らるゝ人があるならば、是非ともそれを筆記して見せて下さい」に始まる柳田からの昔話募集の告知である。「此事業の為に多くの労力を費して下さつた方には、其御礼に日々出版する小著「日本昔話集」を拝呈します」と結ばれる。

ところがこの雑誌は、柳田の『学問』と重ならない方向性を手放さない。七月号には「審査は柳田先生に御願ひ致します」という「懸賞紀行文募集」の記事があり、「編輯後記」にも「賞外の方にも二十名を限り柳田先生の昔話集を進呈いたします」と記す。九月号「編輯後記」には「紀行文余り香しい成績でなかつたから今少し先へ延ばす事にした」とある。十月号の同項には「紀行文は先月申上げて置いた通り香しくない成績であつ

たが十二月号から順次発表する事にする。昔嘗（祖母さんに聞いた話）は存外集りがよく喜んで居る。一部発表仕様かとも考へたが一まとめて昔嘗号を出し度いとも思つて居る。日々受取状は上げなかつたが集まつた分は選り分けて柳田先生の手許迄差上げてある。いづれ発表は来年の事と思ふが尚続々と御投稿下さる様御願する」と記される。順調な昔話「聽取」の陰でなされた難産の末、紀行文の入選者二名が十二月号に発表された。

こうして『旅と伝説』が「柳田國男特輯」の「昔話号」を組んだのは昭和六年の四月号。翌五月号は「編輯後記」に有坂與太郎が「旅と伝説」吉例の郷土玩具号はいづれも飛ぶやうに売れる」と記す「第四郷土玩具号」。後に能田太郎が「私の反対したいのは、あの一番売れたらしい郷土玩具特輯号のやうなもの」と公言する、『学問』とは違う向きの舵が、ここにも準備されている。

懸賞紀行文の入選作と思われるのは、二月号、平田芳光「陸前旭浦に伝説を探ねて」。伝説は「探ねて」いくみぶりと相性が良い。六月号、山本尊国「伯耆大山紀行」。K君」という匿名の作法や、「物語」にふられた「ロマンス」というルビが、文芸の香りをさせている。カギカツコを用いた会話のやりとりもあり、文芸の流儀を感じさせるが、その中には「この鐘は何かいはれのありさうな鐘ですね」といった、どこかで見たことのあるような科白も含まれている。そして七月号の高橋宏一「蓼科山紀行」。この紀行は、鉄道省旅客課「初夏の旅」に連続して

レイアウトされており、読者を旅に誘う特集記事のような印象さえも受ける。ここに選ばれた紀行文は、いざれも伝説を「探ねて」ゆく要素を強くもつたものであり、結果として昔話募集との対照を鮮やかに見せて いる。

柳田が誌上で『学問』を訴え、「聽取」「採集」を求めた時、昔話が柳田の期待に応えてゆくのに對し、伝説は「探ねて」いく旅人自身の物語を手放さず、季節ごとの旅への憧れを香らせながら、『紀行文』という舞台に姿を見せてくるのである。

もう一筋の脈である「郷土玩具」。能田が何と言おうとも手放されることはない。昭和十年八月号「第七郷土玩具号」（伝説の附隨する玩具集成）の須田元一郎「九州北部の伝説玩具」には「後記」として「民間伝承」の方で謂ふ、厳密な意味の「伝説」を持つた玩具だけを拾つたのでは、到底御依頼を果す事が六ヶ敷さう」という記述が見られる。「民間伝承」の方では無い様々な書き手と読み手も含めて、『旅と伝説』は刊行されていた。その誌上には『民間伝承論』の広告が出され（昭和九年十月号）、『昔話研究』の会員募集が掲載され（昭和十年四月号）、日本民俗学講習会趣意書が掲載される（昭和十年六月号）。柳田を中心とした『学問』が組織的な動きを活発化させたことは、その外側の読者にも伝わっていたはずである。

◇ 民俗調査の紀行文

昭和七年一月号。難波麗景「御府内八十八ヶ所巡礼紀行」の連

載が始まる。朱印があしらわれている。翌二月号、梶原末雄「信州宝ヶ池の伝説と蚕に関する俗信」にも朱印が付されている。創刊以来の蒐印趣味との共鳴が、こうした記事にも反映している。⁽⁵⁾けれども、この年の夏あたりから、雑誌の印象が少々変わつてくる。

七月号には、本山桂川「島日記」、小寺融吉「越中の田舎を歩いて」、本田安次「遠野紀行(一)」。十月号には、柳田國男「佐渡一巡記」、本山桂川「利島・新島」。十二月号「編輯後記」の六項めにはこうある。「先月は忙しくて何處へも旅せすじまひだつた。新年号編輯がすんだら、温泉地方へ出かけ度いと思つて居る、本号が出来上る頃には早川、高橋の御両人は九州から紀州の方を歩いて居られた、帰京後面白い紀行が頂ける事と期待して居る」。柳田の教えを受けながら日本各地を「あるく」人々の文章が紀行の中心になりつつある。編者の期待通り、翌年二月号に早川孝太郎「南薩摩の旅」、高橋文太郎「南九州の花売り」が寄せられた。

こうして迎えた昭和八年は「旅と伝説」のひとつの節目である。前号の「編輯後記」にあつたとおり、新年号は「婚姻習俗号」、さらに七月号は「誕生と葬礼号」、十二月号はもう一つの柱、「第六郷土玩具号」になつている。

三月号の栗山一夫「旅と伝説」の任務に関して」は、「やたらに特轉号を刊行したり」する態度を批判、啓蒙雑誌として新しい読者を開拓する姿勢を求める。栗山は提言して次のように言う。

「啓蒙的研究論稿——例へば木思石語、昔話新釈の如き——及び方法論的に勝れた報告、批判的論稿、民俗学的紀行報告、定価を

出来るだけ安くし且つ一定すること等が云へるだらう。そして特に啓蒙的研究論稿に就いていふならば、従来は余りにも民俗学的な人達に限られてゐたから、広く他の方面の人達からの民俗学的論稿を求める様にする可きだらう。又、凡そ民俗学界ほど活潑な批判討論のないのは類がない。柳田を中心と据えた体制に批判的な栗山であつても、「民俗学的紀行報告」は支持している。

先ほども触れた能田太郎の「郷土史学のために(フォーケロアと本誌の使命)」は、この文章への反論として五月号に掲載された。「本誌の使命は、すぐれたる旅の経験から始まらねばならぬと私は思ふ。『旅』を生活と遊山との外の今一つの学問の為の手段として更生せしむることこそ、本誌の最初の大きな使命でなければならぬ」。「学問の為の手段」と言わると敷居が高くなつてしまふが、「すぐれたる旅の経験」という言葉は広く読者に受け入れられる可能性を抱いていたはずである。続けて能田は言う。「本誌には勿論紀行文は今日も屢々掲載せられてゐるが、只私の大いに遺憾とするところは、紙屑が余りに多いことであつた。柳田國男先生の紀行のやうなものは誰れにでも書けるといふわけには行かぬにしても、早川孝太郎氏のもの位なら、まだ他にも書ける人はあらうと思ふ。本誌には、先づさうしたすぐれたる紀行を特に心掛けて戴きたいのである」。早川に気の毒な氣もするが、要点を箇条書きした一つめに、「よき紀行文、例へば柳田先生のものや早川孝太郎氏のもの等の如し」とあるから、早川の文章は「よき紀行文」の御手本である。

ここで創刊当初の単語を思い出しながら整理をしておきたい。昭和八年に浮上した「よき紀行文」「民俗学的紀行報告」。それは『名所』との決別を果たした『紀行文』のことだったのではないか。能田の文章の翌月、六月号には「紀行文募集」という記事がある。「民俗学的又は経済的な見方による軽い気のきいた紀行文を募集いたします」なるべく、写真、スケッチを添へて下されば幸甚です」。

七年経つて昭和十五年三月号から、後藤興善の編輯に変わる。そして翌四月号。『旅と伝説』は「民俗言語 紀行 隨筆」のコピーを表紙にいれる。昭和十六年の一月からは「民俗 口碑 言語 交通」

だつたが、七月号から「交通」は「紀行」に戻る。

そもそも『旅と伝説』は民俗学の専門誌ではない。例えば、昭和十四年六月号の巻頭は井上萬寿蔵「長崎への旅から」。巻末「後記」はこう評する「流石に冒んだ文で旅行をなさる方々は是非とも味読せらるべきであります。氏は只今国際観光局庶務課長として、本誌とはもう永い間の御なじみであり且つまた令弟と共に熱心な斯学の支持者であります」。

あるいは、柳田の「食制の研究」が巻頭を飾っていた「特輯食制研究」の昭和十一年の一月号。出口林次郎「ハイキングと流行」が「昭和九年の秋、鉄道省の鳴り物入りの宣伝による後援を受けて以来、ハイキング熱の擡頭は實に目覚ましく」という状況を伝える。そして「後記」には「今年度から本誌を中心とした旅行会を設立する事になつて只今準備中ですが、本号が

店頭に出る頃には設立せられるかと思ひます」。しかし、その後この旅行会の記事は見当たらない。四月号の「後記」には「突然に起つた二・二六事件は、うすく感じて居た事ですが残念な事でした。(略)この突発事件のため、戒厳令が布かれ、未だに解かれません、従つて集会は遠慮せねばならなくなりましたので百号記念会も延期の止むなきに致りました」とある。

軍靴の響く時代ではあつたが、鐵道の広げる旅行の想像力を豊かに抱いた読者がいた。そうした読者の前で民俗学が成熟していったあゆみが、『旅と伝説』誌上に残されている。

◇ 旅と紀行文と柳田國男

ここで少々、『旅と伝説』からはみ出してみたい。大正八年の、水野葉舟「紀行文作法」(春陽堂)をめくつてみる。というのも、「紀行文を書く準備」の章に次のような記述があるからだ。

旅行記といふものは、決してたゞ何でもない人が懐手をして歩いて、自分の面白かつた事や、おかしかつた経験を述べただけでは、その旅行記が含んでゐる面白味は弱く薄い。それで、旅行をする人が、知識が多くれば多いほど、広ければ広い程、その旅行記は複雑な面白味を含んだものになつて来る。(改行)かりにこゝに民族学の研究者が旅行をした。その人は簡単な、伝説や口碑の蒐集家ではなく、経済の学問にも通じてゐるし、文学的の趣味を豊かもつてゐる人でもある

としたら、その人はその土地を歩いてゐる中に、見たり聞いたりする事、そこに出会す事柄、現象、そのさまざまなものに向つて、深い興味をもつて来ることになる。

もう少々続くが切り上げる。この「民族学者」にモデルがあることは言うまでもない。大正期の書物であるから、「民族学者」も誤植とは言いづらい。ともあれ、こうして望ましい旅の実践者として柳田國男の輪郭を描いた上で、「第四章 人情風俗」には「木曾路の旅日記の中より（柳田國男氏の「旅日記」の中より」と題し、紀行文の作例として博文館の『文章世界』（第四卷第十一号・明治四十二年）に寄せられた柳田の「旅日記」（後に『秋風帖』所収）の一部を引用した後、「作例」の節を水野はこう結ぶ。

まづ我々は道を歩き知らない市街^{まち}に到着する。その道には平野があり、山があり、丘があり、川があり、沼があり、湖がある。この地上のいろいろの表れの中を歩いて通つて行くのである、と同時に、その中の人間の営みがある。私達はその人間の営みを見、その人達と逢ひ、少しづゝながらその人の交渉をしながら通つて行くに違ひない。それに従てさまざまな事柄を見聞し感じて道を歩いてゆく。その見聞感想が旅行の内容となるものである。

自然と人情風俗とは、はつきりと切斷されずに旅する身体をとりまいている。そして、旅人自身の学問や趣味が「さまざまな事柄を見聞し感じて道を歩いてゆく」ことを可能にするのである。水野が「簡単な、伝説や口碑の蒐集家ではなく」と評するあたりにも注目しておきたい。長谷川政春は、柳田が「旅」と「紀行文」とを生かし得た「学を大正九年の旅を経験する中で見出していつたと指摘している。⁽⁶⁾ ただし、人々の旅行はそうした柳田を嘆かせるものになつていた。「絵葉書も案内記も心を合せて、今古若干の文人の足跡ばかりを追随させ、わけも無い風景の流行を作つてしまつた」（草木と海と）。後に『雪国の春』所収）と述べているのは、『太陽』の大正十五年第八号である。

◇「木思石語」という名所否定

柳田が「木思石語」を連載した雑誌は『旅と伝説』だつた。だから、本稿前半で指摘したように、雑誌が謳つていた伝説定義のやり直しをはつきりと訴えなければならなかつた。それは、同時に旅についての善導の言葉としても読み解くことができる。再び昭和二年、連載二回め初出時そのまま引用する。

一夜半日の旅の客に取つても、尚伝説が親愛なる思ひ出の種である理由は、それが簡単に且つ容易に、手帳に留められるといふだけでは無い。更に適切なる第二の理由としては、話に物があり記憶に具体的な足場のあることを挙げることが

出来る。(略)たゞへば松の名所を巡つて播州の海岸を旅した者があるとする。帰つて来て其話を試みようとする場合に、先づ頭に浮ぶのは相生松はこんな姿、手枕松はこんな形といふやうに、同じ松ですら一つへ、混合せずに思ひ出すことが出来る。それが偶然に個々の伝説の、差別の目安となるだけでも便利であるが、元々伝説はさういふ目に著き記憶し易い外形があればこそ出来たので、殊に樹や石の珍らしい姿は殆ど其発生の唯一つの根拠と言つてもよかつた。だから何心無く路を歩んで居る旅人でも、容易に珍らしい木や石を見付けて、伝説に行当ることが望まれるのである。

そして連載四回めには、「児事な木ですね(又は変つた石ですね)」「此木(石、塚)には名がありますか」「それは珍しい名前だ。きつと何か「いはれ」が有るでしよう」の採集方法の伝授がある。ただ「懐手をして歩」く旅から、深く見る旅、そして聞く旅へと「深い興味」を持つための身ぶりの伝授である。「村には通例伝説の中心ともいふべきものがあつて、それは多くは氏神の社の附近である。鎮守と因縁のある旧家や別当寺、又共同の井戸なども遠くへは離れて居ない。そこへ行つて見ると必ず何か目に附くもの、何か言はれがあらうと直覺し得る木とか石とかある」、そこで伝説を聞く身ぶりの伝授である。

鉄道省や日本旅行協会とともに、この頃の旅行ブームを支えていたのが博文館である。その博文館が刊行していた『太陽』

の創業三十九周年記念増刊「自然美の日本」に、柳田はある「草木と海と」を寄せた。一つめの節は「名所崇拜」、二つめの節は「紀行文学の弊」。博文館の書物を標的にしたかのよう見出しがある。いや先ほど引用した「絵葉書も案内記も」のくだりなどは明らかに博文館に対する批判になつてゐる。ここでは、冒頭「名所崇拜」一段落めの途中を読んでみたい。

窮天平蕪の野に家居する人民の、奇峰怪石を愛するのは自然の情でもあらうが、我々は谷の民だ。さうして又海から入つて来た移住者の末であり、盆地の窮屈に倦んで居る者である。浜に臨み岬の端に立つて迄、ひねくれた松の樹を歌に詠む義理は無い。松は海に親しい木ではあるが、殊に風の力に本性を左右せられ易い。野中の社などで出逢ふやうな、自由奔放なる大木は、海辺に来ると見られない。たまには珍しいといふのみで、氣の毒ながら木の畸形だ。浜の遊びの面白かった名残に、他に記憶し得る纏まつた印象も無い為に、人が単に松だの岩だのに由つて、聯想の目標をきめるだけである。

『名所』を目指してしまふような旅の中にまず眼につくのは「松」と「石、塚」。同じ見るにしても「野中の社などで出逢ふやうな自由奔放なる大木」の傍らで「きつと何か「いはれ」があるでしよう」と聞くことが、「あるく」ことなのだ、と柳田は教えている。もちろん、それは『郷土』を考え直すことにも通

じていたであろう。

先に触れた昭和八年の「旅と伝説」の任務に關して」の中で、栗山一夫は創刊間も無い時期の同誌について「あやふく旅行協会などの「旅」に類似した低級なものに転落しようとしてゐたのだ」と言つてゐる。その『旅』（日本旅行協会＝後のJTB）の昭和八年七月号に「郷土紹介の原稿を募る」という告知記事がある。「俺の町にはこんな風習がある。こんな名所、史蹟がある。伝説、年中行事、俗謡、土俗玩具は勿論、其地から輩出した偉人、地方の経済状態、或は最近に起つた事件のニュース等、何でも己が隠れたる郷土の市町村に就いて、穏やかな自慢でもよし、隨筆風のものでもよし、要するに読み物として適當な原稿を募ります。各地方読者の郷土愛より出た自信ある作品なら結構」。地方の経済状態はともかく、柳田が対峙していた世間の「伝説」や『郷土』へのまなざしは、こんなようなものだったと思われる。柳田の風景論の特色は生活する者が風景を作つてゆくのだ、という発想にある。⁽⁷⁾「こんな名所、史蹟がある」とか「穏やかな自慢」が、郷土の風景を美しくすることはない。

伝説採集法の传授は、ハンドブックの古典として映つてしまつかもしれない。しかし、「何心無く路を歩んで居る旅人」にとって「その人間の営みを見、その人達と逢ひ、少しづゝながらその人の交渉をしながら通つて行く」と水野葉舟が言つていた旅の実践法だったのではないか。「旅と伝説」といふ雑誌が弘く世に迎へられ」（『木思石語』「自序」）た裾野には、旅の達人として柳

田を思慕する読み方の可能性を残しておいた方がよい。岡書院から『雪国之春』が刊行されたのは昭和二年。『秋風帖』が梓書房から刊行されたのは昭和七年である。能田太郎の文章にも「最もすぐれたる旅行家柳田先生」という言葉がある。「風景の成長（談話）」（初出・昭和八年、後に『豆の葉と太陽』所収）では、「前の人々の足跡を踏んで見ようとする心持を、強ひて自分の風景を愛する趣味と解して見ようとするので、言はゞ一つの型に囚はれて居るものである」という『名所旧蹟』への批判を加えた後、次のように言う。

少なくとも我々の前に自分々の眼を以て耳を以て、もう一度感じ直さなければならぬ所以である。幸ひにしてこの新しい文化は、我々の風景觀を自由ならしめた。物を觀ずる機会は日ましに多くなつた。是をたゞ人の解説を通して、知らうとして居たことは御互ひの誤りであつた。全体に今は少し「読む」といふことに偏して居る。此拘束を抜け出して、改めて生存の意味を学び知る為には、旅でも散歩でも、兎に角にもう少し「あるく」ことが必要だと思ふ。

『名所』を鵜呑みにすることなく、自らの眼で感じることで生きる「あるく」旅人の身体から、伝説についての「確乎たる一派の學問」を「打立て」る発信が「木思石語」だったのである。

◇ 民俗学を学ぶという旅の実践

『雪国ノ春』や『秋風帖』を改版して収めた創元選書は、風景に言及した文章を纏めて昭和十六年に『豆の葉と太陽』を刊行する。周知の通り、この書物には汽車に乗る柳田の姿がそこかしこに認められ、「空から見た東北」までもがある。もちろん、「鹿角郡の花輪で汽車と別れて、やがて旅客から見棄てらるべき折壁の山道を、記念の為に越えて見た」（『豆の葉と太陽』）などと、峰に対するこだわりも綴られてはいるのだが、「旅の面白さを説かう」とすると、勢ひ鉄道や旅館の提灯持になりがちだが、必ずしもそれを避けるに及ばぬと思ふほどに、誰にきいても見てもよいといふ処が一致して居る。たとへば越前の杉津の駅頭から、海に臨んだ緩傾斜を見おろした眺めなどは、汽車がほんのもう一分だけ、長く止まつて居てくれたと思はぬ者は無い」（「旅人の為に」初出・昭和九年）と、車窓の眺めへの前向きな言葉筆にあたつて、鉄道省や博文館を喜ばせるようなこうした発言を敢えて控えている。

汽車の窓から見ることが最終的な目的ではない。「野外で感じ又は考へなければならぬこと」（『豆の葉と太陽』「自序」）があるのである。旅の体験を通じて毎日の生活を豊かにすることを考える。「風景の成長」（初出・昭和八年）は「毎日忙しく働いて、思ふやうに旅行も出来ぬ諸君に」向けてなされた風景の話だった。では、柳田の言葉はどうまで通じたか。検証は難しいのだけ

れども、雑誌読者の中に反応を示さない静かな読者を仮定しても必要がある。『昔話研究』の申込について、「只今迄の処直接の会員が丁度百名に達した。ところで入会者に未知の方々の多いのに一驚を喫した」（『旅と伝説』昭和十年五月号「後記」）という言葉が漏れている。案内記について想像の旅を楽しむ読みがありうるよう、編集者側のいう「未知の方々」、想像の旅を楽しむ静かな読者は、『旅と伝説』にも少なからず存在したはずなのである。昔話研究が盛んに行なわれたのに對し伝説の研究の展開が地味だったのは、もちろん柳田が何に熱心に取り組んだかの反映なのだろうが、読者側からみれば『紀行文』的な「探ねる」身体を禁じられたことによつて魅力が半減させられたことが大きいだろう。伝説とは「毎日忙しく働いて、思ふやうに旅行も出来ぬ諸君に」想像の旅に出ることを可能にするものだつた。しかし、「木思石語」は「伝説の『名所』を訪ねて」ゆく想像を禁じたのである。それに対しても、語り始めの句と語りおさめの句によつて別の世界を括りだしている昔話は「聴取」「採集」という『学問』の身ぶりとの相性がよい。

ただし、『旅と伝説』は民俗学の色彩を強くしても（伝説が抱く旅の想像力を封印しても）、旅の想像力を手放さなかつた。

既に見てきた通り、昭和七年十二月号の「編輯後記」に「先月は忙しくて何處へも旅せずじまひだつた。（略）早川、高橋の御両人は九州から紀州の方を歩いて居られた」と予告され、昭和八年には「民俗学的紀行」が目立ち始める。栗山の「旅と伝

説」の任務に関して」が口火をきつた議論を締め括る「民俗学はどうなる」（蝸牛庵主人）も掲載されている六月号は、民俗学的な「紀行文募集」が掲載されている号だけれどもこの号の「編輯後記」にも同様の「旅せすじまひ」がある。まずは「小生旅行思ひの外永くなりまだ三四日はかかり候、年中行事の統稿はこしらへて宅の机の上に有之候、昨日は可成り冒險な小舟旅行をいたし候て漸く汽車ある所に出申候 五月九日 丹後岩滝柳田國男」。続いて「東北は今桜 桃、李の真盛りです」に始まる「浅虫温泉にて 吉田園輔」の便り。その後、三項目めから「先月はどうく旅せすじまいでした。来月の葬礼号の整理に追はれたのでした」と後記が始まる。すなわち、「毎日忙しく働いて、思ふやうに旅行も出来ぬ」読者は、編集者に身を重ねつつ、柳田たちの旅に想像力を働かせるのだ。九月号にも「宗谷の岬の灯台の下では沃度を探るとして道路一ぱいに昆布を焼いて居る、是ぞ誠に異様なる雰囲気には候」に始まる「北見線声問駅 柳田國男」の通信が掲載されている。

雑誌は昭和九年新年号より一新、本稿冒頭で取り上げた「郷土紹介」欄も姿を消す。雑誌全体が学術色を強めたような印象を受ける。六月号には「柳田「郷土生活研究所」の山村民俗調査」の記事があり、十一月号の「山村スナップ」など、山村調査同人の紀行が多く掲載される。自らの眼で感じることのできる「あるく」旅人たちが綴った各地の紀行である。読者の旅の想像力を、山村調査の擬似体験に使わせるかのような構成である。

ところが昭和十年、『旅と伝説』は大阪支局を設け広告取りを強化する。それまでにも高橋文太郎が重役を務める武蔵野電車などが広告を掲載してきたが、奇しくも「昔話研究は、柳田國男先生の指導により、柳田先生其他の論文と各地の昔話資料を以つて編輯す」という「『昔話研究』会員募集」の記事も掲載される四月号から突然に鉄道事業者の広告が増加し、阪和電車の「君知らずや南紀の白浜」を始め、「四月は大軌で史蹟と伝説の大和へ」「大楠公六百年祭(四五月)の史蹟めぐりは南海電車で」「駘蕩の天地に伝説の名所を訪ねて 敦山電車嵐山電車に!」といったコピーがあふれる。掲載広告の目次もこの号から用意されている。巻頭の記事は柳田も鉄道省旅行課長も日本旅行協会のメンバーも出席する「旅の座談会」。吉田園輔や高橋文太郎も出席している。柳田の昔話研究が大きな動きを見せるとき、この雑誌の中では旅の想像力を刺激する企画がなされる。この舵とりは、『学問』と『商業出版』との均衡ということだろうか。

昭和十二年四月、『民間伝承』の第二巻第八号に後藤興喜が「旅と伝説」の四月号を評する書き出しへ、「今月号を見て、「旅と伝説」は復活したといふ感がする。暫くだれ気味の編輯が続いてゐたのが、本号ですつきりもとの元気な我々の雑誌に帰つた氣持がする」である。同じく第三巻第六号(昭和十三年二月)、今度は牧田茂。「本誌が最近著しく立直つて来たことは欣しい。この号も氣持よく充実してゐる」。あくまでも「『民間伝承』の方」から見た、「気持よく充実」した「元気な我々の雑誌」の「復活」である。

◇ 新体制の中での

昭和十七年、三元社は『木思石語』を単行本として刊行する。「自序」では「旅を愛する若い人たちを聴手として、伝説といふもの、意義を説いて見ようとした」と「十四五年以前」を振り返る。「ちやうど木思石語を書き始めた頃までは、まだ斯ついふ問題に興味をもつ人が、都府のまん中にも沢山に居たのであつた」。「身神鍛錬の大群行動」がとられている今日には「観て来る感じで来るといふやうな、寂しい素直な旅をする者が、いつと無く見られぬことになつた」のだと言う。

『旅と伝説』が「復活」してゆくのは、『昔話研究』誌との関係もあるだろうが、旅をとりまく情勢の変化も影響しているはずだ。「低級」とされた『旅』でさえも、昭和十五年十二月号、澤田四郎作「旅と民俗」の結びにはこうある。「時局柄物見遊山式の旅は遠慮すべきですが、日本の昔をぶりかへつて見るといふ爱国的な旅は真摯の心をもつて行ふ事こそ報国の現れと存じます」。『旅と伝説』では昭和十二年九月号の「後記」に「いよいよ日支事變も大きくなつて来ました」と記された後、季節ごとの旅情報を紹介していた鉄道省の記事も十月号から「鉄道省 秋の陣」「十一月号「武運を祈る 神詣で」と表現を変えてゆく。昭和十三年以降は「徒步旅行」とか「鍛錬」という言葉が目立つ。昭和十三年一月号、山田隆夫「銃後の民俗」。神神も出征を始めている。

昭和十四年一月号に「進軍中にみた支那習俗」を寄せた太田陸郎の死を悼む宮本常一の文章は昭和十八年の二月号。既に表紙にも《紀行》の文字はない。昭和十九年一月号、雜賀貞次郎「百社まわり」。「この百社参りといふのは、氏神をはじめ百の神祠に参拜報賽することであるが、この百社参りは事変等が超ると武運長久の祈願となつて、著しく盛んとなり田辺市内でも行事となる」詳細の報告である。この号が最終号であった。

『民間伝承』第十卷第二号（昭和十九年二月）の「編輯後記」に橋浦泰雄が記す。「時局の要請に応じて『旅と伝説』が廃刊しました。あと僅かで二百号に達するので私情としては惜まれますが、此の誌としての任務は既に尽したからと云ふ発行者萩原氏の別辞は正言で、我々は同誌の永年の貢献を活用して、その功績を銘記したいと思ひます」。

疎開する学童に向けて柳田の準備した文章が『村と学童』として朝日新聞社から刊行されたのは、昭和二〇年九月。「三角は飛ぶ」は、汽車の窓から「観る」ことの意味を説いていた。『木思石語』「自序」には「人が生れ故郷の感覚から離れて、地方といふものをはつきりと学ぶのはこの機会であつた」と、旅の意義が記されている。旅の消えた戦時体制の中で、「あるく」意味を知ることを、自らの眼で感じる身ぶりの獲得を、柳田は明日を担う子どもたちに期待したのである。

◇ むすび

『旅と伝説』に連載された本格的な伝説論である「木思石語」は、『雪国之春』や『豆の葉と太陽』などに纏められる文章とともに、「あるく」ことの啓蒙として読み返すことができる。それは『名所』を「たずねて」ゆく旅を否定し、自らの眼で感じることを強く求めるものであった。『旅と伝説』は、鉄道旅行が促す『紀行文』の想像力や郷土玩具の蒐集といった『趣味』と、柳田の構築しようととする『学問』とを大きく抱きこんで、さまざまな旅を読者に届けていったのだった。だが、戦争の拡大とともに『趣味』を読者に届けることは不可能になり、雑誌は通巻一九三号で終刊する。戦後、『趣味』を取り戻した人々が如何なる旅をしたのかについては稿を改めなければならない。ただし、昭和三十四年から刊行された画報『伝説と奇談』（日本文化出版社。山田書院から版を重ねる）の第十九集と第二十集のサブタイトルは「旅と伝説」。この頃には、武田静澄『日本伝説の旅』（昭和三十七年・社会思想研究会出版部）も刊行されている。やはり伝説は「たずねて」ゆく想像力とともににある。

注

- (1) 本稿では岩崎美術社の復刻版（一九七八）を用いている。
- (2) 索引では「マ行」に整理され易いが、『柳田國男事典』（野村純一ほか編・一九九八・勉誠出版）の「旅と伝説」の項において、花部英雄は「ぼくしせき」とルビを施している。

一九五九 平凡社

（のむら・のりひこ／横浜市立大学非常勤講師）

(3)

『民間伝承』第二卷第七号（昭和十二年三月）において、「愛知県伝説集」（愛知県教育会）を評して閑敬吾は次のようになに言つ。「従来の興味的な羅列編輯法を排し柳田先生の助言に従ひ、山岳、海、河川、石地蔵等の主題を中心として分類されてある。かゝる方法がより学的でもあり、利用者にも多くの利便を与へる。その記述の方法も従来の類書に見る文学的修辞を極力さけてゐることは、贅成出来るが、それに聊か徹底すぎた憾がないでもない。とまれ伝説が科学的検討の必要が云々されてゐるとき、かかる根本資料の忠実な蒐録の世に出ることは喜ばしい」。

(4)

能田太郎「郷土史学のために（フォーケロアと本誌の使命）」『旅と伝説』第六年第五号 一九三三

(5)

朱印・スタンプに関しては『日本学報』に別稿を用意する。

(6)

長谷川政春「旅と紀行文をめぐつて—柳田国男論序説」『国文学解釈と鑑賞』第五十六卷十二号 一九九一

(7)

佐藤健二「風景の生産・風景の解放」一九九四 講談社

(8)

磯貝勇「高橋文太郎略伝」『日本民俗学大系』第五卷